

群 教 セ	F09 - 01
	平15.211集

不登校生徒進路指導支援モデルの研究

- 進路意識の基盤作りに視点をあてて -

長期研修員 影森 美江
 長期研修員 林 加寿郎
 指導主事 武藤 榮一

研究の概要

本研究は、適応指導教室における実態・ニーズから進路指導に視点をあてて研究したものである。その実態から、不登校生徒が進路を考えていく上で自己肯定感と自己理解が大切であり、自己肯定感を高め、自己理解を深める実践をしながら、進路意識の基盤作りを支援するモデルを考察した。さらに、適応指導教室のみでなく、学校においても活用できるモデルを構築した。

【キーワード：教育相談、不登校、適応指導教室、進路、自己理解、自己肯定感】

主題設定の理由

不登校問題の解決は学校教育上の重要な課題の一つである。不登校児童生徒の約半数が施設等の利用をせず、引きこもりに近い状態であること（森田洋司、2003）から、大きな社会問題と捉えられる。群馬県においても、生徒指導上の最重要課題の一つであり、不登校対策支援総合推進事業として取り組んでいる。本研究はその事業の一環として、適応指導教室に通級している生徒を対象に、実態を踏まえて、学校や社会への復帰を支援するモデルを考えた。

1 生徒の実態(全体的傾向)

渋川市適応指導教室において生徒の実態をみると、指導者等の指示には比較的素直に従うが、自分の思考や判断、感情に基づく主体的な表現が少ない。特に、作業などにおいて、その傾向がみられる。自己主張することもあるが、周囲から否定されてしまうと主張をやめ、内に秘めてしまう。また、言語による過剰な表現で自己防衛したり、成績や学習にこだわることによって自己防衛したり、寡黙などにより自己防衛をしたりする生徒がいる。そのため、人とかかわることがうまくできず、好ましい人間関係を築くことが苦手である。

また、観察から、親に満たされない愛情を指導者に求めているような言動もみられる。

学習面では、各自がそれぞれ得意な教科や興味のある内容に取り組むことが多いため、学習内容に偏りがある。また、集団での学習経験も少ない。通級する生徒は、表1のように個人差が大きい。

表1 生徒の実態

アセスメント	進 路	学 力	社会・心理	健 康
生徒A	複数の高校について興味を示している	進学を希望するようになってから、学習に取り組むようになった。	落ち着かない面もある。行動力や思いやりがある。	体を動かすことを好み、運動に意欲的である。
生徒B	希望する高校が絞	こだわりがあり、	物事にこだわること	小柄であり、運動は

	られつつある。	特に英語と数学に熱心である。	による、防衛反応がみられる。	苦手である。
生徒C	プロのスポーツ選手になることを望んでいる。	取り組みにむらがあり、作文など書くことが苦手である。	対人関係において、大変緊張しやすい。	身長が高く、野球などのスポーツに積極的に取り組む
生徒D	デザイン関係の職業に就きたいと考えている。	英語が苦手であり、数学と国語を中心に取り組んでいる。	物事に受け身であり、無口・無表情である。好き嫌いがはっきりしている。	激しい動きは苦手である。
生徒E	夜間の定時制高校への進学を希望している。	国語を中心に取り組んでおり、数学にも取り組むようになってきた。	マイナス思考である。占い、オカルトなどの自分の世界をもっている。	欠席がちである。

2 適応指導教室のニーズ

生徒たちは、閉ざされがちな社会の中で生活を送ることが多いため、自分の進路に対する不安を人一倍大きく感じている。しかし、不安を感じながらも、自分が希望する進路の実現を強く願っている。また、指導者は、人とかかわりながら進路への意識を一層高めさせて社会性や学力を身に付けさせ、それぞれの生徒が希望する進路を実現できるように支援したいと考えている。しかし、進学したが学校生活への不適応から退学をし、定職に就かず、時々適応指導教室に顔を見せに来る卒業生もいる。現在通級している生徒のほとんどが中学3年生であることから、生き方と関連させて、社会性を重視した進路指導が大切であると考えられる。

研究のねらい

適応指導教室の実態やニーズから、進路指導に役立つ進路指導支援モデルを構築する。さらに、そのモデルを、学校においても活用できるように一般化し、不登校生徒のみならず、不登校の予防においても有効に活用できるようにする。

研究の内容

1 ニーズから考えた研究の視点

(1) 基本となる考え

ア 自己肯定感の必要性

自己肯定感とは、問題を理解しそれを解決する能力と、自分の関心や欲求を大切にしそれを擁護する権利についてその人がどのように判断しているかを反映しているものである。つまり自己肯定感が低いと、人生にどこかしっくりこない感じがして、個々の問題に対して間違っているというよりも、一人の人間として、間違っているという感じを抱くものである(ナサニエル・ブランデン、1992)。そのため、生き甲斐や生きる価値が見いだせにくくなると思われる。これは、進路を選択する上で、大きな支障となると考える。

また、自己を認めることができなければ、他者をも認めることができず、協力・共同して物事に取り組むことが難しいと考えられる。それらの点から考えて、進路を考えていく上で、まず自己肯定感を育てることが必要であると考えられる。

イ 自己理解の必要性

個人が自分自身を「自分のあるがままに」理解することが大切である。本研究では、自分のあるがままの姿をみつめさせながら、自分自身のよさや、それ以外の部分をも肯定的に捉えようとする自己意識を持たせ、肯定的な自己概念を築かせることに着目した。特に、本人が気付いていないよさや可能性に、新たな気付きとして目を向けさせ、考えさせていきたい。そのため、本研究における自己理解とは、自らのよさや可能性に気付き自分を肯定的に捉えることとした。

自己理解を深めることにより、これまで気付かなかった自らのよさや可能性に気付き、進んで自己表現したり人と関わり合ったりしながら進路についての意識を高めることができると考える。

(2) 進路学習の基本的な考え

ア 進路学習の必要性

中学校では、「生き方」を踏まえながら系統的に進路指導が行われている。しかし、適応指導教室では、同じ教室に異学年の生徒が混在していることや、指導者の数が不足していること等からそのような指導を行うことは難しい。そのため不登校の生徒の中には、「高校には行きたい。」という希望は持っているが、実際には、生き方を含めた進路意識に至っている生徒は少ないと考える。

「中学校在学時に指導して欲しかった事柄」(平成11年3月 文部科学省 「中学校における進路指導に関する総合的実態調査報告書」)の中で、「自分の個性や適性を考える学習」を望む回答がすべての回答の半数を超え、最も多い数値となっている。系統的に進路指導がされている中学校においても、「自分の個性や適性を考える学習」の充実を望んでいるのであるから、適応指導教室においてもその実態にあった進路学習の充実が必要であると考えられる。

イ 適応指導教室の実態における進路学習

先に生徒の実態で述べたように、子どもたちは、人とかかわることが他の同年齢の子どもたちに比べると少ない。国立教育政策研究所生徒指導研究センターが作成した冊子(2002)の中の「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」に、職業的(進路)発達にかかわる諸能力として、人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力の四つが示されている。適応指導教室の子どもたちの実態を踏まえたとき、この四つの能力の中でも人間関係形成能力の育成が必要であると考えられる。人間関係形成能力においては、自分のよさや個性がわかり、他者のよさや感情を理解し尊重することや、他者に配慮しながら積極的に人間関係を築こうとするなどの能力・態度が育成されることが期待されている。

このことから、適応指導教室における進路学習にとって、自己理解を深めさせたり自己肯定感を高めさせたりすることは重要であると考えられる。

2 実践の結果から得られたモデル

進路を考える上で、国立教育政策研究所生徒指導研究センターが作成した冊子(前掲書)の中の「職



図1 進路発達にかかわる諸能力

業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」を参考にすると、進路を実現するために、図1のような4つの能力が柱となっていると考える。この4つの力を支えている基盤となるものが、自分を肯定的に理解することであると考える。

そのことを踏まえた上で、一般的な問題解決のモデルであるPlan、Do、Seeのモデルを参考に、実践、試行を繰り返した。

その結果、活動の中では、自分を見つめ、相手とかかわりながら、相手のことをみるということ、さらに、自分を振り返る中では、自分を知り、かかわるよさを感じながら、相手を知っていくということがわかった。

また、実践を重ねていくと、実態やニーズが変わっていくために、このモデルの「自分」や「相手」は変化していく。つまり、年齢や個性、特性によって内容が変わっていくことがわかった。

さらに、子どもが発達した段階においては、実態・ニーズの把握は子ども自身ができるという場面も生じることから、Pの部分は指導者と子どもとともに必要であると考え、図2のような形となった。

以上のようなことから、図2の進路指導支援基本モデルができた。図2の中の括弧で記載されている部分は、最終的な進路の目標となる。社会をみて、かかわる中で自分の生き方をみる、また、社会を知って、かかわるよさを感じながら、自分の生き方を知っていくという最終的な進路モデルである。「みる」、「かかわる」、「知る」が、このモデルのキーワードである。実態やニーズから具体的な内容は変わってくるが、このキーワードは本実践から得られたモデルの中心的な概念である。

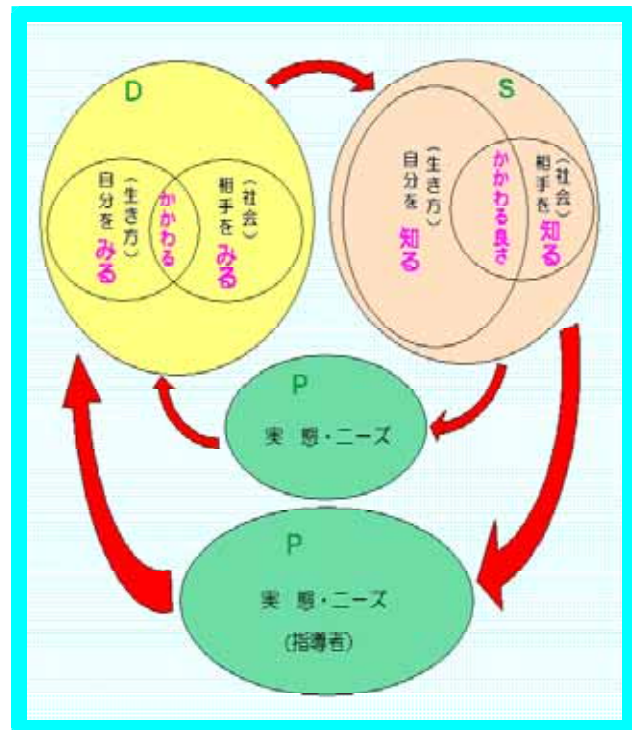


図2 進路指導支援基本モデル

研究の方法

適応指導教室における実践の計画は表2の通りである。

(1) 実態・ニーズ把握、ラポール作り

生徒の実態やニーズ、また、適応指導教室のニーズを把握する。また、実践をするにあたっての信頼関係を築く。

(2) 実践

自己肯定感を高めるエクササイズ5回、自己理解を深めるエクササイズ4回。プログラムの詳細は表3、進路意識とエクササイズの関係については図3参照。

研究者2名のうち1名は実践者、1名は観察者とした。

(3) 検証

研究者の観察、適応指導教室の指導員の観察を主とする。また、エクササイズ後の生徒たち自身による振り返りや感想も、その資料とする。

表2 適応指導教室における実践計画

期 間	回 数	実 践 内 容
6月30日～ 9月25日	5回	実態・ニーズ把握、ラポール作り
10月 1日～10月17日	9回	実践、観察（検証）
11月 6日	1回	事後観察（検証）

表3 プログラム

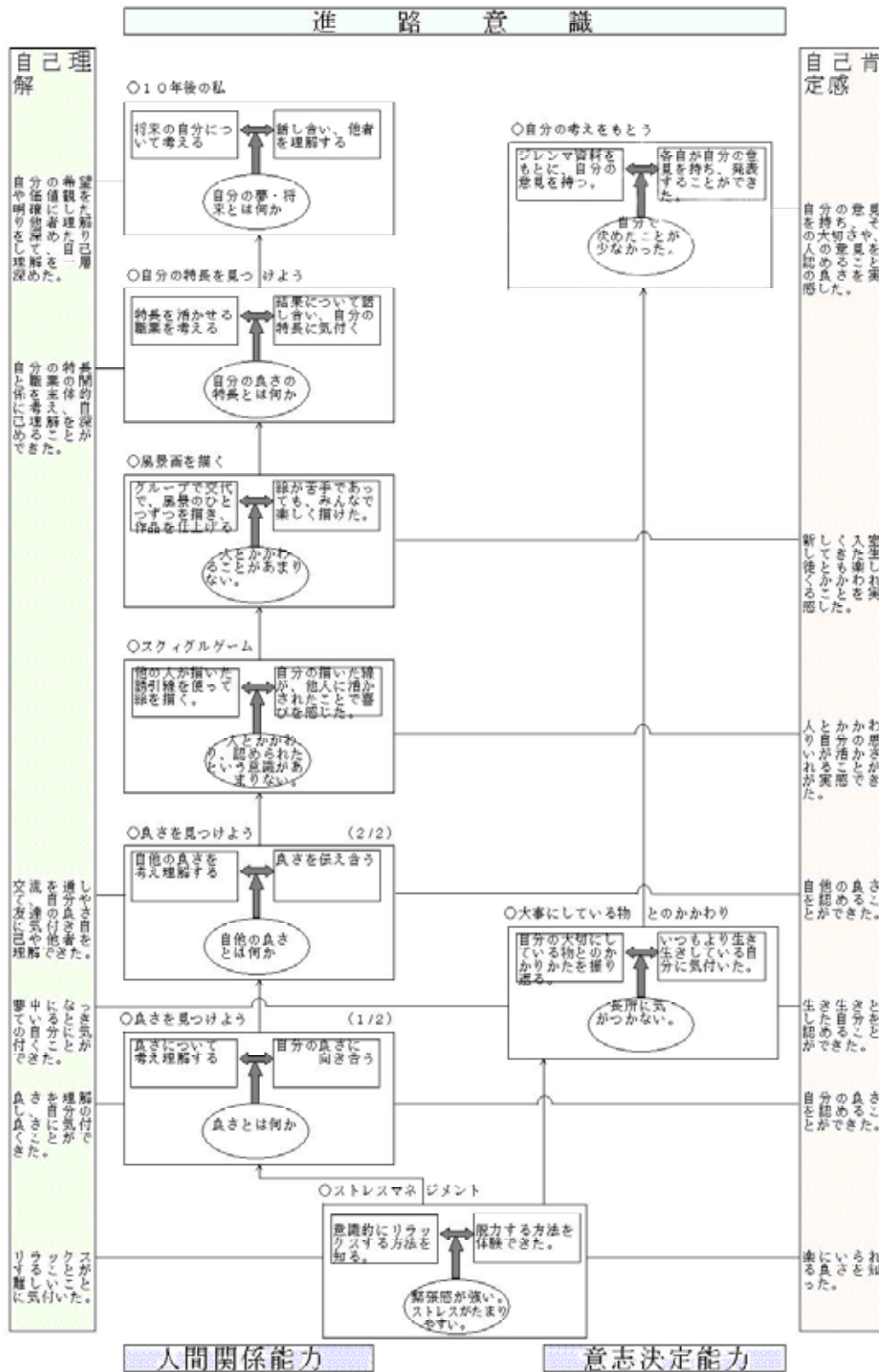
自己肯定感を高めるプログラム案

ストレス度	マネジメ ント法	自己肯定 感	活動	共通のねらい	集団内での関 係	指導者との関係	生徒D	生徒A	生徒C
高	呼吸法 ・筋弛緩 法	低 (1 am not OK.)	・スキュー ルゲーム1 2 3 ・風景画1 2	・緊張を和らげる。 ・リラクゼーション の仕方を学ぶ。 ・呼吸の中で活動がで きる。コミュニケーション スキルを高める。 ・意識を指導者に向 かわせる。 ・気持ちを落ち着け る。 ・お互いの表現を認め 合う。 ・他の人と協力す る。 ・お互いを認め合 う。 ・各自が描いた線の 良さを認める。 ・リラクゼーション の仕方を学ぶ。 ・他の人とかわり ながらリラックスで きるようになる。	・1対1の関 係 ○—○ ・3人の関係 (1人を中心 とした関係) ○—○ ○—○ ・3人の関係 ○—○ ○—○ ○—○	・専任教員(肯定役) ・友だち同士を結 びつける役	・気持ちを楽にする 方法を知る。 ・体の力を抜くこと でリラックスできる ことを知る。 ・自分の個性を 活かすことができる ことを知る。 ・自分の個性を 活かすことができる ことを知る。 ・自分の個性を 活かすことができる ことを知る。	・気持ちを楽にする 方法を知る。 ・体の力を抜くこと でリラックスできる ことを知る。 ・自分の個性を 活かすことができる ことを知る。 ・自分の個性を 活かすことができる ことを知る。 ・自分の個性を 活かすことができる ことを知る。	・緊張が強いので、 意識的に深呼吸を 繰り返す。 ・体の力を抜くこ とでリラックスす ることができる。 ・自分の個性を 活かすことができる ことを知る。 ・自分の個性を 活かすことができる ことを知る。 ・自分の個性を 活かすことができる ことを知る。
低	セルフ リラクゼー ション・バ ンク ション	高 (1 am OK.)	・モラルジ レンマ資料 を1 2 3	・意識を指導者に向 かせる。 ・ジレンマを起すこ とによる内的 部分への働きかけ。	・3～4人の 関係 ○—○ ○—○ ○—○	・専任教員(肯定役)	・言葉で自分の意 見を言葉で表現で なくてもよい。 ・他の人とコミュ ニケーションする 方法を学ぶ。 ・他の人とコミュ ニケーションする 方法を学ぶ。	・人の意見を聞き ながら自分の意見 を表現する。 ・自分の意見が 認められること を喜び、自信を つける。 ・自分の意見が 認められること を喜び、自信を つける。	・二人で協力して二 つの作品を仕上げる。 ・二人で協力して二 つの作品を仕上げる。 ・二人で協力して二 つの作品を仕上げる。

自己理解を深めるプログラム

自己理解	他者理解	活動	ねらい	A	B	C	D	E	他者と関係 する	指導者
深まる	深まる	1. 友達と つながり をよ くする 2. 自分 の強 さを 認める 3. 自分 の関 わり を 認める 4. 10 年後 の 自分 を 描く	・友達とつながり をよくする。 ・自分の強さを認 める。 ・自分の関わりを 認める。 ・10年後の自分を 描く。	・自分の強さを認 める。 ・自分の関わりを 認める。 ・10年後の自分を 描く。	・自分の強さを認 める。 ・自分の関わりを 認める。 ・10年後の自分を 描く。	・自分の強さを認 める。 ・自分の関わりを 認める。 ・10年後の自分を 描く。	・自分の強さを認 める。 ・自分の関わりを 認める。 ・10年後の自分を 描く。	・自分の強さを認 める。 ・自分の関わりを 認める。 ・10年後の自分を 描く。	・自分の強さを認 める。 ・自分の関わりを 認める。 ・10年後の自分を 描く。	・自分の強さを認 める。 ・自分の関わりを 認める。 ・10年後の自分を 描く。

図3 進路意識とエクササイズ関係図



実践とその結果の概要

ここでは、実践例として2例を挙げておく。その他の実践は資料編を参照。

1 実践例(1)

スクイグル

スクイグルとは お互いに用紙に自由に誘引線をひき、それを交換する。用紙をぐるぐる回しながら、その誘引

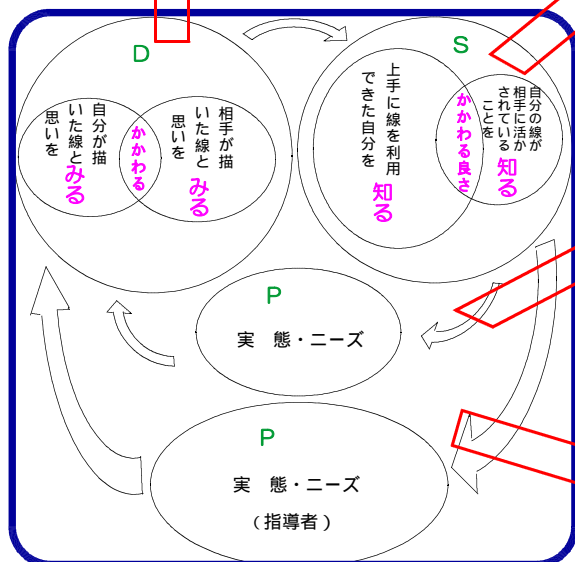
線からどんな絵がみえてくるかを考え、その絵を誘引線を利用して表現するという描画療法の一つである。

ねらい

他の人が描いた線を用いて絵を描くということを通して、人とかかわるという意識を持ち、役に立つという経験をしながら、お互いを認められるようにする。また、色を塗ることで、カタルシスの効果をねらう。

活動内容

- ・それぞれが自由に線を描く。
- ・無作為に用紙を交換し、描かれた線を利用して自由に絵を描く。



子どもの発言から

- ・「すげえ。」 ・「うめえ。」
- ・「俺が描いた線が、こんなちゃんとした絵になってる。」
- ・「はじめはどうしようかと思ったが、もらった線が描きやすかった。」
- ・「あの線がこんな絵になったんだ。」

実践から

- ・言語表現の苦手な子どもがいる。
- ・抵抗が強い子どもがいるので、用紙の端から1cmくらいのところに枠を描かせる。

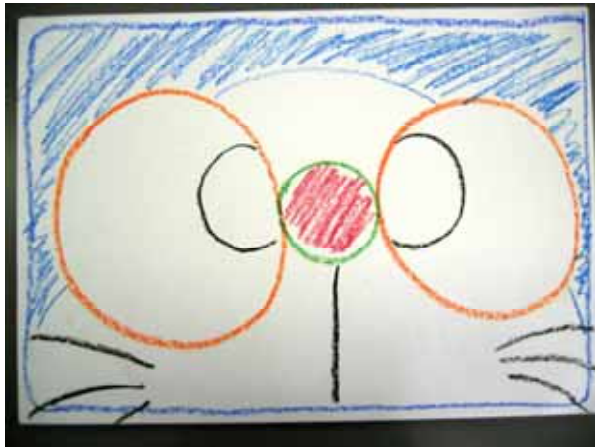
観察から

- ・自分の線がどのような絵になっているか、みんなが気にしていた。
- ・お互いに交換し見せ合い、うれしそうにしていた。
- ・絵を通しての交流がよくなされていた。

留意点

- ・シェアリング(振り返りの活動)を大事にする。
- ・用紙はA4判程度の大きさ、筆記具はクレパス類がよさい。

スクイグル作品



(中3 男子)

誘引線は、緑色の円。
それを上手に活かしてかわいいドラえもん
のアップになった。



(中3 女子)

誘引線は緑色の曲線。
その線が道となり、さわやかな
丘が表現された。



(中2 女子)



偶然にも、もう一人ドラえもんを描いて
いた。誘引線は黒の円。ドラえもんの表
情にも工夫がみられる。

実践の様子



自己理解の
エクササイズを
しているところ



スクイグル



協力して
風景画を描いて
いるところ



2 実践例(2) 自分の特長を見つけ、それを活かしてみよう!

ねらい

自分のよさの再発見を活かして、自分の特長と進路との関係を主体的に考える

活動内容

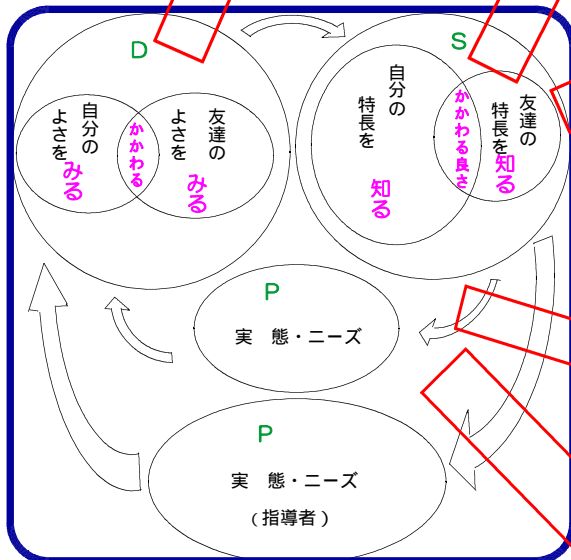
- ・短所と思えることでも見方を変えれば長所であることを考える。
- ・自分のよさを付箋紙に記入し、それを分類しながら「職業型紙」に貼る。
- ・結果についてお互いに話し合う。

- ・結果をみて、感じたことや気付いたことなどをまとめる。
- ・感じたことや気付いたことを発表し合い、話し合う。

子どもの発言、振り返りカード

から

- ・「こんな仕事もあるのか。」
- ・「自分にもできそうかな。」
- ・「特長がみえてきたぞ。」
- ・「予想と違い、意外な結果だった。」



実態

から

- ・自分のよさを進路に活かすことを考えることが少ない。
- ・人とかかわることが苦手で、交流する相手が限られている。

留意点

自己理解を深めさせるために、人とかかわるや振り返りの場やとき間を大切にす。

観察

から

- ・自分の特長と職業との関係について意欲的に調べていた。
- ・結果について発表したり話し合ったりして、楽しそうに交流できていた。

3 適応指導教室指導員の観察(指導員の話から)

生徒D、Eは、以前はノートを隠したりしていたが、学習面でも分からないところを学ぼうという姿がみられるようになった。いろいろなことに自信がないということを知ってくれて

指導してくれているということを感じたのではないかと思います。生徒Dは、学校の三者面談には行くと言っていたが、その前に学校に戻った。生徒Eは、マイナス思考をすることが多かったが、多少肯定的に捉えることが多くなってきた。「アー、私にもよいところがあったんだ。」という言葉が発したのが印象的だった。

生徒Aは、学校の三者面談に行くと言っていた。生徒Cは、一番緊張も強く、担任が来ても会えない状態であった。しかし、会話の中で、相手をはぐらかす等が減ってきている。教育センターのキャンプオリエンテーションでは、かなり自分を出せていたようだ。生徒Bは、今まで考えていた進路とは違う進路も考え始めた。

自分を振り返り、自分を見直すよさいきっかけになり、発見もあった。それぞれの子どもの中に今回の実践が残ったと思う。また、かかわないからかかわらないのではなく、少しずつでもかかわっていったことで、心が開いたと思う。集団全体が変わってきたと感じた。

本研究から得られたこと

1 支援モデルについて

進路学習において、子どもたちの進路意識を高めるためにはPDSのサイクルを踏まえた上で、Dではみること、Sでは知ることが重要であると考えられる。

今回の実践では、Pを踏まえた上でDにおいては、自分自身をしっかりみることから始まる。そして、自分自身をみることに加えて、共に活動しながらかかわることを通して、相手のこともみることとなる。相手をみることによって、自分と相手の相違点に気付くこともできる。このような活動が繰り返されるのがDである。

次のSは、活動を振り返る内容となる。活動を振り返ることが、自分自身を深くみつめることへと発展するものと考えられる。つまり、振り返る活動を通して、かかわるよさを感じながら相手のことをより深く知り、そして自分自身を深く知ることになるのである。

なお、この支援モデルは、子どもや学校などの実態に応じて、学校でも活用できるモデルと考える。今回の実践では、子どもたちの実態に応じて、Dの活動においては自分をみたり相手をみたりし、Sの振り返りにおいては自分を知ったり相手を知ったりするモデルが構築された。そこで、子どもや学校などの実態やニーズを踏まえて、それぞれの思いや願いに応じた内容を、Dの活動において「みたり」、Sの振り返りにおいて「知ったり」することによって学校などでも活用できるモデルであると考えられる。そして、最終的には、進路支援のモデルとして、生き方や社会をみたり知ったりすることへと発展すると捉えた。なお、発達に応じたモデル例として、小学校低学年から中学生までのモデルを図5において示した。

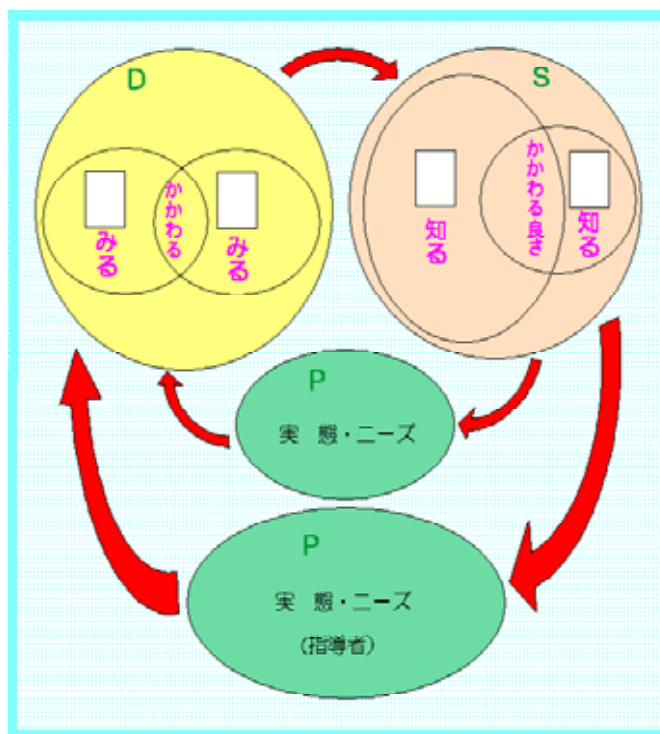
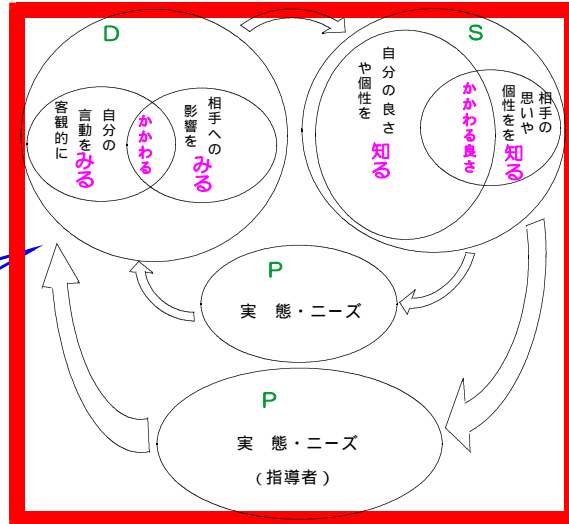


図4 支援モデル

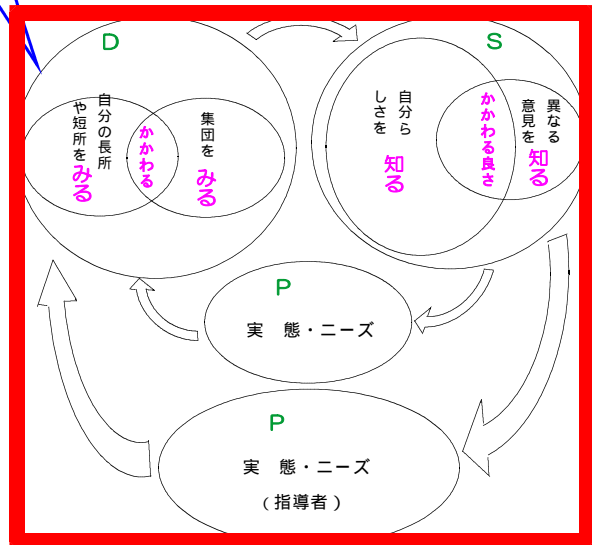
図5 発達に応じたモデル例



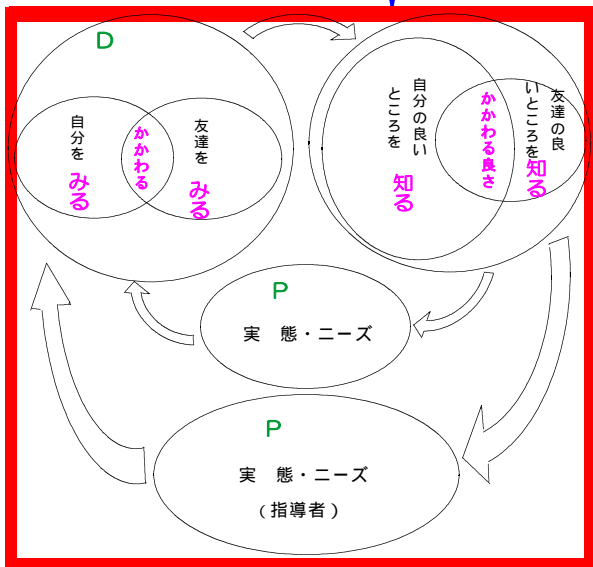
中学校



小学校 高学年



小学校 低学年



提言

みる、かかわる、知る = 進路

それぞれの子ども、学校によって、実態・ニーズが異なっていますので、「思い」や「願い」も違ってきます。それぞれの「思い」や「願い」に応じたモデルを作り、進路指導の充実を図りましょう。

2 プログラム作成上の留意点

常にモデルをベースにおいて作成する。

Pに関する留意点

- ★ 進路に関するニーズ・意欲に見合った活動を、実態に応じて無理なく計画する。
- ★ 実態・ニーズの把握は、調査等を実施することに加えて、活動中の観察や、子どもの振り返りによって把握することを大切にしたい。

Dに関する留意点

- ★ コミュニケーションを徐々に広くとることができるようにする。
- ★ 「自分を認める」、「他者を認める」活動を設定する。
- ★ 言語表現が苦手な生徒に対しては、絵画等別の表現方法も取り入れる。
- ★ ジレンマを起こさせる等、内的な部分へ働きかけられるような内容を取り入れる。
- ★ リフレイミング（枠組みを変えてみる。この場合は短所を言い換えて長所として捉えること。）等を取り入れ、多くの長所が見つかるような工夫をする。

Sに関する留意点

- ★ 自分を振り返るような内的な活動を、積極的に取り入れていく必要がある。
- ★ 活動や作品を、誰が認め、褒めるのかをはっきりさせておく。
- ★ 他の子どもからも認められるような場を設ける等の配慮をする。
- ★ 少しずつ進路意識を意図した内容を取り入れていく。

3 適応指導教室において、プログラムを実施するときの留意点

プログラムを作る際に考えていくことは、基本的には変わらない。それらに加えて次のような配慮が必要である。

Pに関する留意点

- ★ 一人一人の実態を十分に理解し、無理な活動をさせないように注意する。できない場合はできなくてもよさという配慮が特に必要である。
- ★ 緊張感が強い子どもに対しては、その子どもが実施しやすいようリラクゼーションの方法と一緒に考え、普段の生活に取り入れていく。
- ★ 予定していた人数と違う場合でも実施できるような配慮や、計画を中止したときの腹案を用意するなどの準備が必要である。
- ★ 特に適応指導教室では、自分を振り返るような内的な活動を積極的に取り入れていく必要がある。

Dに関する留意点

- ★ 少しずつルール作りをしていく。当番等の役割を決めたり、活動におけるルールを決めたりし、徐々に適応指導教室全体のルールを決めていけるようにする。
- ★ あとから入室してきた子どもはすぐにその枠組みに入ることが難しいと予測される。その子どもとよさく話し合いながら、無理のないようできるところから参加するように配慮する。また、他の子どもたちともよさく話し合い、相互に理解できるよう配慮する。

形態について

- ★ 適応指導教室によって、子どもが活動する形態は様々である。机を囲むような形で活動することは、他の子どもとかかわりやすいという点で有効であろう。しかし、それだけでなく、学校の教室と同様に一定方向を向いて、一斉授業の形にすることも取り入れていく必要がある。特に、不登校が長引いてしまっている子どもには、学校のイメージを思い出させる工夫も徐々に必要である。

まとめ

本研究は、適応指導教室での実践を踏まえて、進路指導支援モデルを構築したものであるが、学校においても進路を考える上で、このモデルが活用できる。その際、その学校の実態やニーズから、モデルにあてはめる思いや願いを具体的にすることが大切である。

主な参考文献

- ・月刊ホームルーム編集部編 『生徒の理解と自己実現を図るガイダンス』 学事出版(2000)
- ・河合 伊六 桜井 久仁子 『不登校』 ナカニシヤ出版(2002)
- ・小林 正幸 『不登校の予防と再登校援助』 ほんの森出版(2002)
- ・國分 康孝 『エンカウンターで学級が変わる 小学校編2』 図書文化(1998)
- ・國分 康孝 『エンカウンターで学級が変わる 中学校編3』 図書文化(2000)
- ・國分 康孝 『エンカウンター 心とこころのふれあい』 誠信書房(1995)
- ・国立教育政策研究所生徒指導研究センター 『すべての子どもたちの職業観・勤労観を育むために』 (2002)
- ・森田洋司 『不登校 - その後』 教育開発研究所(2003)
- ・文部科学省 『中学校における進路指導に関する総合的実態調査報告書』 (1999)
- ・ナサニエル=ブランデン 『自信を育てる心理学』 春秋社(1992)
- ・ポーブ、ミッキヘイル、クレイグヘッド共著 『自尊心の発達と認知行動療法』 岩崎学術出版(1992)
- ・仙崎 武 『キャリア教育読本』 教育開発研究所(2000)
- ・仙崎 武 野々村 新 渡辺 三枝子 菊池 武尅
『入門 進路指導・相談』 福村出版(2001)
- ・相馬 誠一 『適応指導教室 よみがえる「登校拒否」の子どもたち』 学事出版(1998)
- ・矢木 武 『ガイダンス・カウンセリングで学校を変える』 教育開発研究所(2002)